

# 浜松中納言物語における姉妹物語の意味

藤 河 家 利 昭

## はじめに

『浜松中納言物語』において、中納言が思い慕う河陽県の後には吉野の姫君の腹に転生することになっている。この二人は異父同母の姉妹である。自明のようであるが、この間柄で転生が行われるのはなぜであろうか。この物語では「ゆかり」や形代が意味を持たない、或いは否定されていると言われている。<sup>注1</sup>それは転生してでも中納言と河陽県の後が結ばれるというこの物語の独自の構想に基づく。しかし、同母の姉妹の腹に転生することの意味は明らかになっていないと言いがたい。

この物語は『源氏物語』の、特にその宇治十帖の影響を受けている。この吉野の姫君には中君や浮舟の面影があると言われる。<sup>注2</sup>宇治の三姉妹の中で、河陽県の後と吉野の姫君の姉妹に近いのは、父は同じであるが同母という点で大

君・中君の姉妹に近い。吉野の姫君には浮舟の運命に似るところがあるが、大君ないしは中君と異母妹の間柄にある点では離れてくる。この辺りの事情に焦点を当てて河陽県の後転生の意味を考えてみたい。この物語にとつてやはり『源氏物語』の、主として宇治十帖の大君、中君、浮舟の物語をいかに克服するかが課題であつたと思われるのである。

## 一 河陽県をの転生

この物語の河陽県をの転生については、「長恨歌」の末尾の、蓬萊宮にいる楊貴妃の言葉、「天上人間会相見」によつて玄宗皇帝と再会することが約束されているのに想を得たものと言われる。<sup>注3</sup>ただこの物語の場合、なぜ異父同母の吉野の姫君の腹に転生するのであろうか。

先ず二人が異父姉妹であることについては、この物語の

舞台が遠く日本と唐に隔たった設定であることに関わっていると思われる。河陽県の後には日本に遣わされた秦の親王の子であり、「かの国の后」(巻の一、一六二)となる運命に従って渡唐する。一方、吉野姫君は日本にあり、帥宮の子であるが、母子は父から離れ、尼君の後世を妨げる存在でもある。この日本と唐に隔たった姉妹が中納言を介して結び付き、姉が妹の腹に転生するのが物語の基本構想である。<sup>注4</sup>

次に二人が同母姉妹であることについては、死後に中納言の夢の中で告げた後の言葉から考えてみたい。「月のいみじく明かきに」、「かやうなる夜の月をもるともにうちからたひてながめし恋しさは、いと堪へがたし」と、中納言が自分の許にいた吉野の姫君の行方が分からなくなつて思ひ歎いている時である。

「身をかへても一つ世にあらん事いのり思す心にひかれて、今しばしありぬべかりし命つきて、天にしばしありつれど、我もふかくあはれと思ひ聞えしかば、かうおぼし嘆くめる人の御はらになんやどりぬる也。菓王品をいみじうたもちたりしかども、我も人も浅からぬあひなき思ひにひかれて、猶女の身となん生まるべき」  
(巻の五、四〇二)<sup>注5</sup>

命が尽きて天に生まれていた后が再びこの世に転生するのは、中納言の生まれ変わつても一緒にになりたいと祈念する心に引かれ、自らも中納言を愛しく思つた故である。中納言は「身をかへてのみこそ、今はかの御あたりによるやうもあらめ」と、自分が生まれ変わったら後の側に近付くことが出来ると思ひ、さらに「生をかへても、かたみにさぞかしとおぼしかはして、我が父宮に逢ひたてまつりしやうに行きあひたてまつりて、后のおぼすらん御心のうちを見まほしく思わびつ」(巻の三、三〇七、八)と、転生した父皇子に逢うことがなつたように自分が生まれ変わつて后の心の中を知りたいと思つていた。その心に引かれた后が姫君の腹に転生するのは、中納言が姫君の行方が分からず思ひ嘆いていることを契機としているようである。また女の身と生まれることについては、自身と中納言の浅からぬ無益な思ひに引かれた故であると言う。これ以前に中納言は、尼君の四十九日も終わり、姫君を迎えに来た時、「雪は降りながら月のいと明うさし出でたる」(巻の四、三六〇)という師走の雪の降る月夜に、姫君には大将の姫君にも言わなかつた河陽県の後との契りのこと、さらに若君が生まれたことも語つていた。この時は明け方の月を一緒に眺めているので(三六二)、后が夢に現われた夜には同じ

月夜のこの夜のことを回想しているのであろう。この転生を告げた後の言葉に対して、中納言は「我こそ身をかへて御あたりにあらんと思ひねがはれつれ、さばかりめでたく照りか、やき、世の光とおはせし御身をかへさせんとは思ひよらざりしを」(巻の五、四〇三)と、后自身が転生すると告げたのを予期しなかつたことと受けとめている。

この場面は后死後のことであり、また后自身が愛執の念をうち明けていることなど、『源氏物語』朝顔巻の、源氏が故藤壺宮のことを思いながら寝た夢に宮が現われて、源氏が紫上に宮のことを語つたのを恨んだのを思い起こさせる。この夜は源氏が紫上に「冬の夜の澄める月に雪の光あひたる空こそ、あやしう色なきものの、身にしてみても、この世の外のことまで思ひ流され云々」(二・四八〇)と語つたような夜であつた。藤壺宮は死後も源氏への愛執の念を晴らし得ない、というより死後であるからこそうち明けることが出来たのかも知れない。源氏は二人の密事によって成仏出来ない宮を思つて、「何わざをして、知る人なき世界におはすらむを、とぶらひきこえに參うでて、罪にもかかりきこえばや」(四八六)と、自分から宮のいるあの世に行つて罪を代わりに受けたいと思つている。この『浜松』では后が夢に現われ、愛執の念に引かれてこの世に転生す

ると告げている。これには姫君について思い歎いている中納言を救済しようという意味もあるのである。このようにこの物語では、先の朝顔巻の場面を踏まえながら、男と女の立場を入れ替えて、后の方が再びこの世へ中納言の嘆きを契機として生まれ変わることにしたと見ることが出来るであらう。

なお宇治の大君が亡くなつて七日七日の法事をする頃、薫が「雪のかきくらし降る日」に眺めて暮らし、「十二月の月夜の、曇りなくさし出でたる」(五、三三三)を見て、「おくれじと空行く月をしたふかなつひにすむべきこの世ならねば」と、大君の行つた西方浄土を慕う歌がある。源氏と藤壺宮の物語、薫と大君の物語はそれぞれ『源氏物語』正編と続編の要であり、いずれも死んだ女君の住むあの世を男君が訪れたいと思つている。それに対してこの『浜松』では逆にそのような男君の心に死んだ女君が応える物語が作られたと見ることが出来る。また中君は薫が亡き大君のことで「とざまかうざまに忘れん方なきよしを、嘆きたまふ気色の心深げなるもいとほしくて」(宿木巻五、四三七)、大君の「人形」として異母妹の浮舟の話をする。この辺りも河陽県の後が中納言の嘆きを契機として転生を告げた事情に通うものがある。薫は浮舟を見て「ただいま

も、はひ寄りて、世の中におはしけるものを、と言ひ慰めまほし」(四八一)と思うが、その時に、玄宗皇帝が亡き楊貴妃のいる蓬萊宮を方士に尋ねさせ、釵だけを伝えられた『長恨歌』の故事を引き合いにして、それよりも「慰めどころ」があるとされている。しかし異母妹である浮舟は大君の「人形」でしかなく、不幸な運命をたどるのである。

次に後の転生を促したと見られる中納言の嘆きについて考えてみたい。中納言は後の亡くなったことを聞いた後、姫君の行方が分からなくなった時に姫君を「このなくさめばかりにこよなく思ひさまされつる御かたみ」(巻の五、三九四)と思つていた。その時の、姫君を連れて行つた男のことから我が身のことと及ぶ中納言の嘆きは次のようである。

ことはりといひながらねたう侘しき事かぎりなう、思しのだむべき方なく、「人ぎ、は物くるはしきやうなれど、いかでか尋出て、とりかへしてしがな」と、このごろは、さかしう思すまし、心もひとへにみだれて思ふもいと心うく、さまことに思ひとりてし身をも、かくもろこしにても此世にても、このひとつゆかりにかうのみいみじく心をみだり歎わぶべき契りの有けるも、かつはうらめしう思し知れて、

なにごとを我歎らんかげろふのほのめくよりもつねならぬ世に  
(巻の五、三九五)

中納言の嘆きは今までの澄ました心も乱れてしまうほどのものである。そして、中納言は河陽県の後とそのゆかりの姫君のことで心を悩まし歎くのを前世の因縁と考えている。このように姫君のことで歎くのも后との縁によるものである。これに対して后も「かうおほし嘆くめる御腹に」と転生することを促されたのではなかるうか。これは先に見たように自分との密事によつて成仏出来ない藤壺宮の罪に、あの世に行つて代わりたいと思う源氏の心に通じるものがある。このように后は姫君に対する中納言の嘆きに深く関わっている。

これは『源氏物語』蜻蛉巻の末尾で、薫が浮舟の入水を聞いて、大君、中君、浮舟と続く「あやしうつらかりける契りども」を思い続けながら、「ありと見て手には取られず見ればまたゆくへもしらず消えしかげろふ」(二六、二六四)と詠んだ場面を思わせる。この他にも浮舟の忌の期間中に宇治を訪れた薫が「このゆかりにつけてはものをのみ思ふよ」と、宇治の姫君達との憂苦を抱かせる縁を思い、また仏が「心きたなき末の違ひめに、思ひ知らするなめり」(二二九)と思つてるところもある。宇治の物語はこ

の後、小野において出家した浮舟を薫が訪ねることになる。或いはその辺りが後の転生に反映しているかも知れない。

しかし、浮舟は大君のゆかりであり、中君によって薫に紹介されながら異母妹として独自の運命をたどる。后は姫君の腹に転生することで姫君に対する中納言の嘆きを静めるだけでなく、姫君の将来にも関わっていると云ってよい。

このような結び付きの深さからも二人が同母の姉妹であることが前提になると思われる。ここには大君、中君のゆかりでありながら異母妹である浮舟がたどった、二人の男の板挟みとなって入水し、出家する悲しい結末を回避し、克服する作者の意図があると思われる。なお柏木は女三宮と結婚できず異母姉の女二宮と結婚したが「慰めがたき嬢捨」(若菜下巻四、二〇八)であった。『浜松』には異母姉妹の例として吉野の姫君に衛門督の北方がいるが、中納言は「思ひよそへたりける人の御佛に、たとしへなく露ばかり通ひたる所なかりけり」(巻の五、三九八―九)と見ている。

## 一一 中納言と吉野の姫君

次に、河陽県の後の転生を促す契機になったと見られる、中納言の吉野の姫君に対する関わり方はどのように捉えられるであろうか。それは中納言の後への関わり方を側面

から明らかにするであろう。中納言は姫君に逢う以前、その世話をするようになった時に次のように思っている。

「もの、あやめ見知り、たをやかになつかしきありさまにはあらしかし」など思やれど、うちつけにふと思よりむつびよらんの心もなし。」とてもかくても、言ふ方なく、思ふ方なく思へだて、はるかにすべなふ悲しき人の、御ゆかりのあつかひぐさ出で来ぬるぞかし」と、その御なごりある心ちし給ひて、よるひる心にかゝりておぼつかなく、わたくしの我が身の大事の事出で来ぬる心ちし給て、「若君をいかに見せたまつらまし。おさなき程をとをくいてまうでん、とこそせし」とおぼしわづらふ。(巻の三、二八七―八)

中納言は後に妹がいることを後の尼君宛及び妹宛の手紙で知り(巻の二、二五九―六一)、また聖が尼君の素性を語った言葉からも知る(巻の三、二八七)。しかし、後の妹であるということだけで親しもうとは思わず、后に縁のある人であるがゆえに面倒を見るべき種と想っている。これは後の母尼君宛の手紙の中で、中納言を自分の代わりと考えて万事頼りにするようにということが書かれていたのにもよるであろう(巻の二、二六〇)。また后との間に生まれた若君に逢わせようとするのも、やはり後の姫君宛の手紙の中

に、中納言が連れて帰る子に親しむようにとあったのによるのである(二六二)。このように中納言は後のゆかりの人として世話をしようと思うが、それは後の意向に添うものでもあった。

次は尼君の死後、その四十九日も終わった頃、中納言が姫君を慰める場面である。

この御けはひありさまは、やはらかになまめいたるなつかしさも、ただかやうにこそおはせしかと、思ひなしにや、いとよく通ひたまへる、あはれにこよなかるべきなくさめなれど、いつしかよのつねざまにむつびよらんなどはおぼえず、もろこしなどいへば、切なる心のあまりは、風のつてにもおのづから「さてこそなぐさめてあんなれ」と聞かれたてまつらんを、いと空恐ろしうはづかしう、またまぎらはす方なう、一筋に心をとどめたてまつりて、この人を、ただかの御かたみとかしづきて、おほかたの心はなぐさむとも、夢のやうなりし一筋の思ひは、うつろはん方なく、身を代へても、かの御ゆかりの草木と、今一度ならんと念じても、我心の底きよくはこそ、げにあはれとわれおぼす心もあらめ、この姫君の御ありさまの通ひめでたきを見て、かくもとの御心の思ひのみこそいよいよま

され、それにうつろひ慰めんと、思ひ急がる、心もな  
く、  
(巻の四、三四九)

いくら后によく似ていても、世間に普通にあるように姉妹と親しむことは意識的に避けようとしている。ここに世間のあり方とは異なる中納言の独自性が示されている。それは姫君によつて心を慰めると后に聞かれることを憚るからである。また姫君を後の形見として大切にしても、后への一筋の思いが変わるわけではなく、生まれ変わっても再会したいと思っている。その際に自分の心が潔白であつてこそ后も自分を愛しいと思ってくれるのではないかと后の心をも忖度している。そして姫君が后に似ているのを見ても后への思いが募ってくるのである。これは先に后の転生を告げた言葉にあつた、身を変えても同じ世に住みたいという願いに引かれ、それを后自身も深く愛しいと思つたのに対応する中納言の思いであり、后もそれに応えたものと思われる。このように中納言にとつて姫君は后への一筋の思いが変わらないことを示し、益々思いを募らせる存在である。

このことは姫君が中將の乳母子の里に迎えられた時も同様  
に考えられる。

唐国の后は、猶物より殊に気高う、あたりさへ光りて

見えし、猶こよなう思ひ出でらるるに、事忌もせられず、やがて涙のこぼれ出でぬるを、「かう思わたさるるかたみをたづね出でば、やがてもむつびよりて、心もなぐさむべきぞかし。されどこの人を切に思ふ心ざしに、聖のいひしさう恐ろしう、思ふ方の御形見と、かぎりなき心をつかふこそ、かの御ために心ざしのなほかぎりなきにてはあれ。よのつねのすぢになりなば、我心なぐさみなん事も、飽かずくちをしくおぼえ、一すぢの思ひにしみてあらばや、そこにあはれとおぼし出づる心のつき給はん」と思ふ心切にふかくなりまさりつつ、

(巻の四、三七二)

中納言は、姫が二十歳以前に懐妊すると身を破滅させる宿世があるという聖の戒め(巻の四、三五八)も加わつて、あくまで後の形見として大切にすることによって后への限らない愛情を貫こうとする。また世間に普通にあるように妹に親しくすれば不満足な慰められ方しかできないであろう后への一筋の思いを貫いていけば后もそれに応えて愛しいと思つてくれるであろうと考えている。ここでも先の后が転生すると告げた言葉に照応する点がある。また中納言の世間とは違う生真面目さが特徴付けられ、姫君の役割は后への限らない愛情を引き出すことにあると言うことが出来

る。一方で大将の姫君も尼でありながら「夜のとまり」であつて、「いかならん事を思ふとも、またこの御有さまには、人をならべて、この世に見るべきことならぬぞかし」(三七二)と、吉野の姫君に向かう心を抑制する役割を果たしている。

以上のことから、中納言の場合、この時は后がまだ生きていることもあるが、吉野の姫君が河陽集の后と同母の姉妹としてよく似ているにも拘らずその思いが一筋に后に向かう。姫君はそれを裏付ける役割を持つている。他に同母の姉妹として尼姫君と宮の御方がいるが、中納言は「宮の御方は、にほひこそこよなうおとりけれど、あてにをかしう、心にくげなる方などはまたをかしかんめり」(巻の四、三六八)と、「にほひ」の点で格段に違いがあると見ている。この物語では先の衛門督の北方の場合も併せて、后と姫君の周辺でも姉妹との結婚が行われることはない。宇治の中君は、同母の大君亡き後、薫には「あやしきまでただそれとのみおぼゆる」(宿木巻五、三八三)と見え、中君への思いを抑えかねている。浮舟は薫にとつて「恋しき人によそへられたる」(浮舟巻六、一三七)と、亡き大君を偲ぶよすがでしかない。吉野の姫君はこの二人の役割を併せたような存在であると言えよう。

### 三 河陽県の後と吉野の尼君

『浜松』の中では、転生の例として他に、中納言の父故式部卿宮が唐の帝の第三皇子として河陽県の後腹に転生している。この場合には后或いは唐の帝は父と血筋が繋がっていたわけではないようである。中納言の父の転生が中納言の渡唐を導く意味で物語始発の契機となるものであり、河陽県の後腹の転生が中納言の後への思いが成就することが予告されるという意味で物語の終結を齎すものである。のみならずこの二つの転生は、父式部卿宮（唐の第三皇子）から皇子の母河陽県の後、後の母尼君、そして尼君の娘吉野の姫君へと物語の筋道をたどって行けば因果の糸で繋がっているのである。

先に見たように后が転生するのは中納言と後の思いが一つになったからであるが、それを推し進める要因として、中納言が吉野の姫君の世話を引き受けることよって、後の母吉野の尼君に対する孝養を代わりに果たした事情を考慮する必要があると思われる。

后は中納言に託した尼君宛の手紙の終わりの方で姫君のことに触れている。

又もの、たぐひのおはしますなるやうに、聖のかたり

侍しも、いとゆかしう、あはれに心ほそくおはしますらん御身に添ひておはすらんも、あはれにうらやましうもうれしうも侍や。おとこに物し給はましかば、もしこの世にわたり給事もやと、待ち侍なましを、それさへいみじうくちおしう心憂く、この中納言、宮をよのつねならず、いみじうおもひきこえさせ給へるゆかりに、ゆめゆめをろかには侍らじ、よしなふなどおほし疑はず、をのが身を代へて渡りたるとおぼしなして、万をたのみおぼしめせ。こゝにもさなん頼み侍。つゆ他人となおぼしなしそ。（巻の二、二二六〇）

后は妹の世話も中納言に頼むように直接言っているわけではないが、中納言がいれば姫君のことも含めて面倒を見て貰えると考えているであろう。姫君には逢うことが出来ない嘆きと中納言の連れて帰る子に親しむように言い送っている。また尼君も、后が中納言のことを疎遠にしないで何事も相談するように、また「身を代へたるとさへ思なせ」（巻の三、二七〇）と手紙に書いているのを見た。尼君の夢に現われた僧の言葉によれば、仏が後の尼君に対する「孝の心」（二八三）に感じて、后に中納言と契りを結ばせることよって、母親の世話をさせようとする「方便」（すぐ後に「仏の方便あはれに」とある。二八四）であり、それが尼



君の、娘の頼むべき人を見定めて後生の安楽を祈ろうとする心と一致したものであるという。また尼君の死の直前にも中納言が尼君に対して「兎などのあらんやうにうち添ひて」行き届いた世話をするのを、尼君は「夢に見しやうに、仏の御方便限りなう、もろこしの後のまことのかたみにこそ物し給けれ」(三三二)と、後の身代わりのように思い、姫君のことを頼んで、長年の願いである、ひたすら仏を念じることがなつたと中納言に言っている。こうして尼君は極楽往生を遂げたと人々に思われている。さらに尼君の死後、中納言が姫君を京に移そうとする時に、聖は中納言に、尼君が後生の思いがかなうのであれば姫君がこの世に生きていける便りを見せて欲しいと祈っていたが、中納言が尼君母子を尋ね出したので願いがかなって往生を遂げた由を語っている(巻の四、三五八)。このように中納言は、結局后に代わって尼君の願いをかなえたことが繰り返して語られているのである。

このことは中納言自身も吉野に籠って亡くなった尼君の菩提を弔うところで次のように思っている。

このころの嵐のはげしさ、松の響さへあひて、木の葉のきはひ散り、晴間見ゆるおりはすくなく、搔きくらししぐる、ほどの心ほそき、山伏ならねども、涙留め

がたうあはれなるにも、まづ「もろこしには、わがかく公私わすられて、この御きやうをくると、夢のうちにも知られたてまつりたらんはしも、あはれと思さざらんやうあらじ。かゝる事やはあるなど知り給はで、琴うち弾きなどしてこそ、ながめ給らんかし」と、悲しうおぼしやられて、

思ふべき思ひをひとり思にも行きて語らんまほろしもがな

(巻の四、三四〇)

この場面は『源氏物語』桐壺巻若しくはその典拠である長恨歌の影響が見られるところであるが、内容は異なり、尼君に対して後の代わりに孝養を尽くしていることが知られれば后が心を動かされない筈はないと思つている。桐壺巻において帝は桐壺更衣の身代わりとして藤壺宮を入内させることになり、長恨歌においても幻術師が蓬萊宮に行き楊貴妃の「天上人間会相見」という再会を約する言葉で玄宗皇帝に伝えた。河陽県の後が中納言の心に応えて再会するかも知れないことは予想し得る。

このように後の母尼君への孝養という観点に立つと、姫君は尼君にとつて後生の願いを妨げる実の娘である必要がある、結果として后と同母の姉妹とならざるを得ない。これは『源氏物語』若紫巻における、紫上の行末を氣遣う祖

母の尼君の立場と似ているが、吉野の尼君が姫君の母であり、また後生の願いが強い点が異なっている。后は生前においては五歳の時に別れた母の身の上をひたすら気遣っているのである。

ここで思い合わされるのは、中納言と后との契りが結ばれるに至ったのも、中納言が父式部卿宮に対する「孝養の志」のために渡唐を思い立ったことから始まっていることである。そこには源氏が藤壺宮との密通によつて父桐壺帝を裏切ることになった事情が周到に回避されているのである。皇子は、前世に中納言と親子であり、子への思いに引かされて転生してきた事情を母后に語つたのに続いて次のように言っている。

「(略)されば、「知らぬ国の人をうちつけにしたしくむつび、思ふやうにも」とぞ人も思ひ侍らめども、昔の心のおぼえ侍るにより、常に見まほしく、あはれに覚え侍を、御心にも疎くな思しめしなさせ給そ。ひさしくも侍まじかなれば、返りなんのちの名残のおほさん、かねて思ひ侍」

(巻の一、一六五―一六六)

この言葉は桐壺巻で、帝が藤壺宮に源氏と疎遠にしないように言い、それが二人の關係が始まる端緒になったのと似ている。しかし『浜松』の場合、父の生まれ変わりである

皇子は、中納言と后との關係において直接の当事者ではない。皇子は二人を結び付ける役割を果たすのみである。ただ源氏と藤壺宮の密通と御子誕生が源氏の行末に大きく関わっていたように、『浜松』の場合も二人の間に生まれた若君は「日本のかため」(巻の一、二〇八)となる筈であり、そのことが中納言の身の上にも大きく関わってくると考えられる。そこに父の中納言の行末への目に見えない導きを読み取るべきであろう。なお父が既に故人であるという点では、故柏木が遺愛の笛を薫に伝え、帝の婿となる運命を導いたと思われる例がある。このように父皇子は中納言と后の關係そのものに直接関わることはなくても、父の子への思い、子の父への「孝養の志」によつて父子が再会したところから二人の關係が始まっている。従つて父の存在はこの二人の關係を導き出す淵源と言えるであろう。

そして、二人の關係には后の母尼君の存在も関わっている。中納言が「菊の花のゆうべ」に后を見た後、二人のことが次のように描かれている。

また中納言のかくわたるとき、たまひしより、あはれにゆかしくおぼされしに、御子も中々、わがよの人に、はものとおはするを、此人をば常に見まほしく、なつかしき事にもむつびさせ給へば、しげくまいり給

を、たちいで、御らんずるたびごとに、「心にかかりてゆ、しくおぼつかなく思かたの人ぞかし」と、あはれになみだぐましく思さる、御心の通ふにや、中納言も菊のゆふべはおもかけ離れず、「また見たてまつらばや」となげかしきまで思ひ渡り給。

(巻の一、一六五)

后の中納言への好意は母を氣遣う心に端を発している。また皇子から中納言が前世において子であったことや疎遠にしないようにという言葉を聞いた時も、中納言に対して「我もいみじう覚ゆる方様の人とおぼしつるだにあはれにむつまじかりつるを」(同、一六七)と、母恋しさ故に親しく思っているの、中納言に言葉をかけた気持ちになっている。

このように二人の関係は、中納言の父への思いと后の母への思いが一つに繋がったところから生じていることが分かる。既に中納言と父との再会は果たされた。それが中納言と后との関係の前提になっている。残るのは后と母尼君の再会である。これは果たされることがないが、尼君は中納言を「もろこしの后のまことのかたみ」と思っているので実質は成就されたと見てよいであろう。そして、そのことを前提として后が転生し中納言と再会することになると

考えられる。その時に吉野の姫君の腹に宿ることを告げたのは、母尼君の往生を妨げる絆という経緯があったのに加えて、先に見たように后自身、中納言が姫君のことで思い嘆いているのに触発されたからであると考えられる。なおこの辺りは浮舟が薫と匂宮との間に立つて苦悩する時に、「よからぬ事を引き出でたまへらましかば、すべて、身にはかなしくいみじと思ひきこゆとも、また見たてまつらざまし」(浮舟巻六、一五八―九)という母の言葉が死を決意する一因になったことが思い合わされる。『浜松』ではそのような母と娘の背反が回避され、この物語なりに克服されているのである。

### おわりに

以上、河陽景の后と吉野の姫君が同母の姉妹である事の意味を、后が姫君の腹に転生することを中心にこの物語の特質を考えてみた。この後の転生の物語では『源氏物語』の、主として宇治の大君の形代浮舟の登場等に着想を得ながらも、異母妹であることにも起因する入水、出家などの悲しい結末や母と娘など親子の背反が回避され克服されていると考えられる。作者は同母妹への転生や子の親への孝養という形で『源氏』の行き当たった課題に立ち向かい、

その打開と物語の新しい領域の拡大をはかろうとしたのである。それは読者の期待に応えるものでもあつたらう。

注1 菊地 仁氏「浜松中納言物語の在唐卷——構想の変化について——」(中古文学第十七号 昭和五十一年五月)

神田龍身氏著『物語文学、その解体——『源氏物語』「宇治十帖」以降』一六三頁 平成四年九月 有精堂刊)

注2 石川 徹氏著『古代小説史稿——源氏物語と其前後』四一六—七頁(昭和三十三年五月 刀江書院刊)

注3 雨宮隆雄氏『唐后』は何故二度転生したか——浜松中納言物語に於ける「長恨歌」の影響について——(平安文学研究第五十一輯 昭和四十八年十二月)

注4 雨宮隆雄氏『浜松中納言物語』の構想と主題と題号について(平安文学研究第五十四輯 昭和五十年十一月)

戸叶信枝氏「浜松中納言物語に関する考察——夢と主題——」(お茶の水女子大学国文第三十九号 昭和四十八年六月)

注5 『浜松中納言物語』本文の引用は松尾聰氏校注日本古典文学大系本により、巻数、頁数を示す。以下同じ。

注6 『源氏物語』本文の引用は日本古典文学全集本により、巻数、頁数を示す。以下同じ。

注7 「げにあはれとわれおぼす心もあらめ」の「われ」は本文上問題もあるようなので(日本古典文学大系本補注四八

七頁)、ここでは除外して考えた。

注8 伊井春樹氏「吉野の姫君の運命——浜松中納言物語の構想に関連して——」(愛媛国文と教育第三号 昭和四十六年六月)は、吉野の姫君を「次に来るべき唐后の転生を導く前奏」と位置付けられている。